

## 課題 新キタスマ様式

新型コロナウイルスは、世界的に拡散し、学校は遠隔授業、職場はテレワークが続いています。これまでには無かった生活であり、コロナ以前には戻れないとも言われています。そして、ウィズコロナの新しい生活様式を超えて、私たちの仕事・生活環境の変化が、次の時代の生き方を創るかもしれません。もし、あなたが、テレワークを積極的に取り入れるなら、生活、仕事の場所を何処に求めますか。

自分ならではの新しい生活環境を想像し、「新キタスマ様式」の住宅を創造して下さい。

### 計画条件

- ・北海道内の地域と敷地、住戸形式、家族構成等は自由に設定してください。

### 賞金

- ・最優秀賞 25万円（1点）
- ・優秀賞 5万円（2点）
- ・奨励賞 2万円（4点）

### 締切

- ・2020年9月30日(水) 持参の場合は16時必着。  
なお、土曜日、日曜日は、受付できません。  
郵送の場合は9月30日(水)消印有効。

### 参加資格

- ・一般、学生等を問いません。
- ・北海道内居住者とし（学生・生徒は北海道内の教育機関に在籍している者に限りません）。
- ・個人参加、グループ参加は自由です。

### 提出物

#### (1) 図面

作品名、設計趣旨及び設計意図を表現する図面（縮尺は自由）。図面には、氏名、記号、サインなどを記入しないでください。A1(841×594)サイズ一枚、横づかい。表現は自由です。ハレパネ又はスチレンボー

ド（厚さ5mm程度）などでパネル化してください。

#### (2) 返信用ハガキ

受付番号をお知らせするために使用しますので62円の官製ハガキに応募者の住所、氏名を記入して提出してください。

（官製ハガキ以外は、受付できません。）

#### (3) 応募用紙

応募作品の「作品名」と応募者の郵便番号、住所、氏名（フリガナ）、所属先名（学生は、学校名・学年）、電話番号をA4版の用紙に記入して（形式は自由）応募作品とともに提出してください。

### 審査委員（委員は五十音順）

委員長 米田 浩志

北海学園大学工学部 教授

委員 赤坂 真一郎

(株)アカサカシンイチロウアトリエ 代表取締役

委員 小澤 丈夫

北海道大学大学院工学研究院 教授

委員 小西 彦仁

ヒココニシアーキテクチュア(株) 代表取締役

委員 佐藤 孝

北海道科学大学 名誉教授

委員 澤田 貞和

(株)日本工房 代表取締役

委員 松田 真人

(株)都市設計研究所 代表取締役

## 選考経過

### ①一次審査（2020年10月5日～9日）

一次審査通過者の受付番号は10月中旬に主催者ホームページ（www.do-kjk.or.jp/）で発表します。

### ②二次審査（2020年10月28日13:00～）

一次審査通過作品から（ベスト10）と各賞（7作品）を決定します。

二次審査は、新型コロナウイルスの影響を鑑み、動画配信での報告を検討しています。

## 入賞者発表

### ・2020年11月初旬

入賞者に直接通知するとともにホームページでも発表します。

## 入賞作品の展示等

### ①2020年11月24日(火)～11月27日(金)

大通ビッセ1階ホール（札幌市中央区大通西3丁目）

### ②2020年11月30日(月)～12月4日(金)

大五ビル 6階ホール（札幌市中央区大通西5丁目11）

- ・1次審査通過作品は、協会広報誌「ひろば」(12月発行)に掲載します。

また、最優秀賞の方には、同誌への寄稿をお願いします。

## 応募作品の著作権等

- ・応募作品の著作権及び版権は、応募者のものとします。ただし、この事業の趣旨に基づいて、主催者が図書の出版や、新聞、雑誌、その他に掲載又は啓発宣伝などに利用する場合は無償で認めるものとします。
- ・応募作品は原則として返却しません（返却希望の場合は、事務局に相談してください）。

## 第45回「北の住まい」住宅設計コンペ 入賞者名簿

最優秀賞 平田 奈羅 北海学園大学4年

優秀賞 渡邊 憲成 北海学園大学大学院1年

優秀賞 岩谷 蓮 北海学園大学4年  
(共同作品) 飯ヶ谷 健 北海学園大学4年

奨励賞 中村 極 室蘭工業大学大学院1年

奨励賞 伊藤 冠介 札幌市立大学3年

奨励賞 相馬 功希 札幌市立大学3年  
(共同作品) 佐藤 来香 札幌市立大学3年  
泉 朝緒 札幌市立大学3年

奨励賞 上木 翔太 北海道大学大学院1年

奨励賞 寺嶋 啓介 北海道大学大学院1年  
(共同作品)

野田 暁布 北海道大学大学院1年

奨励賞 川去 健翔 室蘭工業大学大学院1年

## 主催

(一社)北海道建築士事務所協会

## 後援

北海道開発局

北海道

(一財)北海道建築指導センター

(一社)北海道建築士会

(公社)日本建築家協会北海道支部

(一社)日本建築学会北海道支部

株北洋銀行

株北海道新聞社

株北海道建設新聞社

最優秀賞

# 「かみひこうきの家」

平田 奈羅

北海学園大学 4年



清涼感をもった爽やかな印象が、わたしたち審査員を魅了した。“かみひこうきの家”は、札幌市南区澄川5条の崖の上につつ。コンパクトなキューブ状の空間とそこに内在する“かみひこうき”という構成によって、ひとつの住宅でありながら、住まい手に広く世界と繋がっていることを、さらに、いつでも世界に向けて飛び立てることを実感させてくれる提案である。

南側と西側への大開口を通して、眼下の緩やかな斜面に広がる住宅地、やや南側に桜山、西北側に藻岩山への眺望を望む。吹き抜けである主空間上部に浮かべられた、逆三角形の断面をもつボリュームは、“機長室”と名付けられたプライベート空間である。崖側に向けられた小さな開口部にはテーブルが設置され、ここにノートブックや書籍を置き、足をぶらつかせながら過ごす時間は贅沢で魅力的だ。また、“機長室”のボリュームや、そこに至る階段やブリッジによって、主空間とそこに繋がる外部空間に、いくつかのゆるやかな領域がつくられている点も巧みである。

本案は、乾いた論理や形態操作だけでは成し得ない、建築がもたらす複合的な豊かさと魅力を改めて実感させてくれる。かつてない漠然とした不安感と閉塞感が私たちを取り巻いている状況の中、今回の課題に見事に応えた、まさに“北の住まい”に相応しい最優秀案である。

審査委員 小澤 丈夫

優秀賞

# 「下はパジャマのままで」

渡邊 憲成

北海学園大学大学院1年

学校や職場ではテレワークが続いており、テレワーク画面の「上半身のみ正装」のウィンドウ・ディスプレイやテレビCMも話題でした。渡邊さんの作品「下はパジャマのままで」は、一階に家族の個室、直上の二階床をテーブルと見立て、開けられた穴から必要に応じて家族が顔を出すという住まいです。密閉・密集・密接という3密に対応したコミカルでオリジナリティのある新キタスマ様式であり、優れた作品です。

孤立したテレワーク生活でのコミュニケーションが問題視されていますが、穴開きの巨大テーブルにその建築的解決を見ることができます。今回の設定は戸建住宅ですが、学生寮や独身寮という住空間の設定も考えられると思います。

審査委員 佐藤 孝



優秀賞

# 「垣間見合う、都市と住まい」

岩谷 飯ヶ谷

蓮 (北海学園大学4年)  
健 (北海学園大学4年)

(共同作品)

現代の住宅はプライバシーがハコに閉じ込められ羅列しただけと問題提起し、ギリシャの住宅をモデルに、鬮(しきい)に注目し、周辺環境と住宅を「繋げて隔てる」新キタスマ様式を提案している。

公的領域と私的領域を繋いで隔てる手法を、見え隠れする本棚のような家具と吹抜と段差によって実現させている。道路側に仕事場、奥に住まいを配置し、上階に行くほど公的空間から私的空間に移ろっていく繋ぎ方も気持ちが良い。空間デザインがユニークでゆたかである。

木材を使う外観デザインは軽快で開放的であるが多様すぎて少しうるさい気がする。もう少し閉じて隔てても良かったのではないだろうか。

しかし、的確に問題提起し新しい生活・新しい働き方を提案する素晴らしい作品である。

審査委員 澤田 貞和



奨励賞

# 「場合分けする住宅」

中村 極

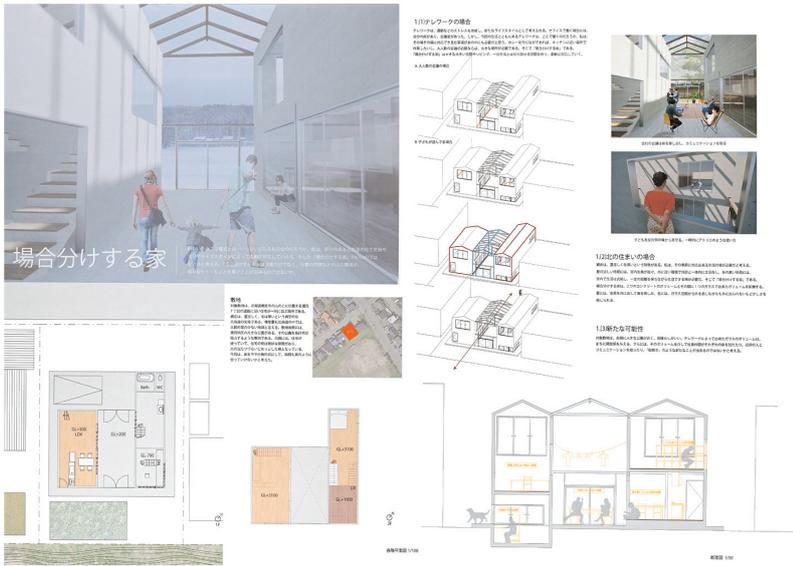
室蘭工業大学大学院 1年

網走に計画されたこの家は、切り妻屋根の家が3棟並んで構成されており、真ん中の一棟が屋根と妻面がガラス張りの空間となっている。それは中央の多目的なバッファゾーンと解釈できる。文章で書くと複雑になるが、実際の平面計画は明快な構成である。

その中央の空間は北国の四季により様々な利用が想像でき、また南側の公園や北側の道路と視覚的に繋がり、開口部の開閉により室内が外部化されたり内部化されたりする。両サイドの棟（空間）との距離をつくり、時にはこの空間に人々が集まるなど中心的な場所ができています。家の中の外であり、外部と物理的にも視覚的にも繋がり、一方で人と人を分ける空間ともなりタイトルの「場合分け」が理解できる。

課題の「新キタスマ様式」にフィットする秀作だが、場所性においてこの場所でなくてもいい弱さが上位賞を逃した。

審査委員 小西 彦仁



奨励賞

# 「\_stairs home」

伊相 佐泉 (札幌市立大学 3年)  
藤馬 藤 (札幌市立大学 3年)  
冠 功来朝 (札幌市立大学 3年)  
介 希香緒 (札幌市立大学 3年)

(共同作品)

作品「\_stairs home」は、大きな「階段」で構成された住宅です。それが密閉・密集・密接という3密に対応した開放的で新しい住宅様式を生みました。さらに「階段」は、生活床そのものであり、テレワーク生活で不足する「運動」の日常化と空間化です。

課題文では「生活、仕事の場所」を求めています。この作品の敷地は札幌芸術の森の隣接地で、裏手には森と谷間に川が流れています。周りの地形や樹木を考慮したレベルの「階段」とバルコニーからは、起伏のある森への視界が広がります。一方、国道側は、階段状の腰窓ファサードにしています。場所を読んだ建築であり、優れた新キタスマ様式です。

審査委員 佐藤 孝



## 奨励賞

# 「自然に傾げる暮らし」

上野 翔太 (北海道大学大学院1年)  
 寺嶋 啓太 (北海道大学大学院1年)  
 野田 暁布 (北海道大学大学院1年)

(共同作品)



シンプルな平面を横切る1本の登り梁に、壁とも屋根とも言える木材がリズムカルに架かり、シェル状の外皮を形づくっています。一見、素っ気ないテントのようにも見えるこの建物ですが、天井高の変化や、屋根に載る季節ごとの素材(雪や木の葉など)と日差しの組み合わせによって、実は内外で非常に複雑な表情を楽しむことができる住まいとなっています。この単純さと複雑さが同居する小さな佇まいに「新キタスマ様式」としての可能性を感じました。

この空間で体験できる様々な現象を、もう少し多角的にヴィジュアル化できたなら、より多くの人に案の魅力が伝わったのではないのでしょうか。

審査委員 赤坂 真一郎

## 奨励賞

# 「離れを繋ぐ家」

川去 健 翔

室蘭工業大学大学院1年



大きな屋根で連続したリニアな居室群(アトリ工群)です。目の付け所はサイコーです。このスキマは、風が通り抜ける季節には半屋外の快適空間になり、真冬でもガラスで一部を覆うことで、ここに陽だまり空間を追加することもできます。

ザンネンです。群の間のスキマが駐車場の様に見えます。本当の主役はこのスキマではないでしょうか? このスキマでは、コロナストレスに負けずに、通り抜ける風の中で隣の家族とジンパも可能ではないでしょうか。何か以上の機能がこのスキマには間違いなく沢山あります。それを我々にちゃんと見せてほしかった。そうすれば間違いなくトップに近づきます。

群の配置や形ももっとランダムで自由なものでよかったのでは、そうすれば、更にスキマが生きてきます。

道内の地方には、平屋建てのつまらない木造の公営住宅がたくさんあります。これを決定的に豊かにできる提案を示唆しているように思います。だから、目の付け所はサイコーです。

審査委員 松田 真人

佐藤 春 樹

学校法人美専学園 北海道芸術デザイン専門学校2年



佐藤 椋太 (北海道大学大学院1年)  
大沼亮太郎 (北海道大学大学院1年)  
澤田 昂彬 (北海道大学大学院1年)

(共同作品)



平塚 夕 馬

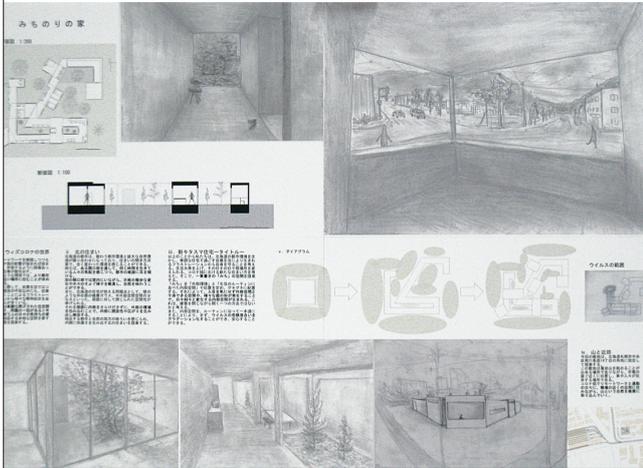
学校法人美専学園 北海道芸術デザイン専門学校2年



# 1次審査通過作品

向井 芽愛 (北海学園大学 4年)  
上村 祥馬 (北海学園大学 4年)

(共同作品)



三浦 光雅

北海学園大学大学院 1年



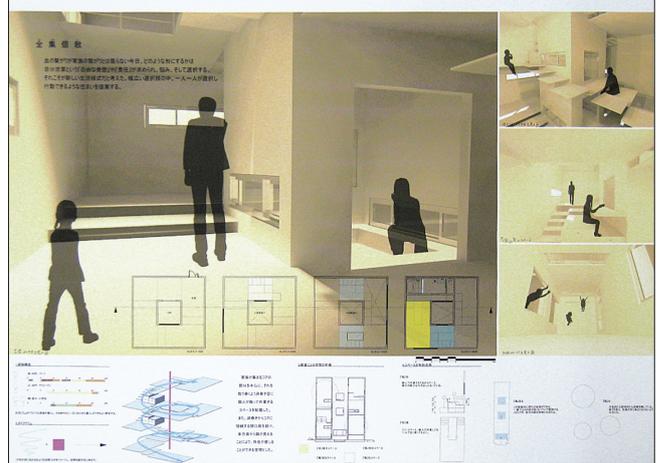
成田 陽香

札幌市立大学 4年



澤口 瑠衣

学校法人美専学園 北海道芸術デザイン専門学校 2年



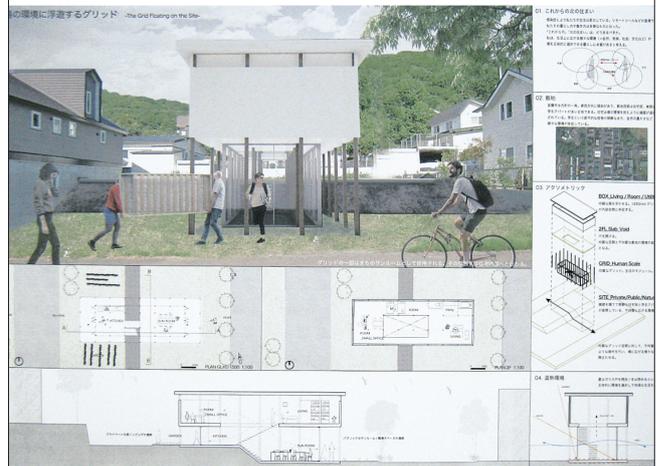
越後 駿太郎

北海道科学大学 4年



大西 将貴

室蘭工業大学大学院 1年



# 1次審査通過作品

原田 芳貴

星槎道都大学 4年



川幡 優人

北海道科学大学大学院 2年



国貞 佑弥

室蘭工業大学 4年



コンペ審査



大通ビッセ展示会

## 第45回「北の住まい」住宅設計コンペ 総 評

今年2020年の初頭から新型コロナウイルスの感染が拡がり、現時点11月においても終息する兆しはない。この新型コロナウイルスの拡がりによって、日々の生活が大きく変わらざるを得ないことに気付かされることになった。特に仕事や学習の場が社会から家に持ち込まれ、今までとは異なる住空間のかたちが求められることになった。このような変化は一過性のもので楽観視しつつも、徐々に日常に組み込まれていく風景を目の当たりにすることになる。この状況の中で、45回目を迎える北の住まい住宅コンペの開催に向けた準備が始まった。各イベントの中止が続く中、関係の方々の努力によって例年通り開催にこぎつけられたことは喜ばしい限りである。長い歴史を持つ北の住まい住宅コンペの中で、開催の可否を検討せざるを得ない局面を迎えたのは初めてのことであろう。しかし、困難を抱えながらも社会に向き合うのが北の住まい住宅コンペの使命でもあるとの認識から着実に準備が進められた。今年のコンペの課題は、このような状況を踏まえ「新キタスマ様式」に決まった。北の住いの在り方を追求すると共に、新型コロナウイルスの感染の拡がりに対応する新たな生活形式の建築空間が求められる課題であった。

今年の応募締め切りは、例年より遅い9月30日であった。応募総数は53作品と昨年以上の応募数があった。不安定な社会ながらも、このコンペや課題への関心の高さを応募数から読み取ることができた。その後、10月5日から9日の6日間の中で、第一次審査を行った。各審査委員が7票を持って作品を選出した。各委員1票以上の票が入った作品数は19であった。この19作品は第一次審査通過作品として位置付けられた。その後、10月28日に第二次審査会が開催され、19作品の中からベスト10作品が選出された。引き続きベスト10作品から入賞を前提とした7作品を選出した。以降の審査は、例年公開で行っていたが、今年は残念ながら公開審査は中止となった。代わりに、HPから発信するために審査の様子を動画で記録をした。不慣れた動画撮影環境の中ではあったが、審査委員間における議論と複数回の投票を重ねながら、最終的に最優秀賞作品1点と優秀賞2点、そして奨励賞作品5点を選出した。

最優秀賞作品（平田案）は、初期の審査の段階から注目されていた作品であった。傾斜する壁によって内部から外部へ、そして広い空へと意識を誘う。断面形状の操作がとても秀逸であった。この内部空間にたたくことで想像以上の開放感が得られるであろう。日常＝プライベート空間と非日常＝パブリック空間がさわやかなイメージを背景に統合されていた。優秀賞作品（渡邊案）は、今回の課題に対して的確に答えていた作品であった。プライベートな普段着の半身が隠されたうえで、高さの操作によってパブリックなよそゆきの半身の現れが変化する。生活者の動きによって新たな室内風景が生み出されていた。とてもユニークな着眼点を持った作品であった。もう一つの優秀賞作品（岩谷・飯ヶ谷案）は、外部との関係に様々なアクティビティを想定しながらリアライズされていた。多様な触手のような箱の形態は、都市に向けて拡がりを生み出す。このような操作によって、プライベートとパブリックが重層的に関係付けられていた。奨励賞作品の5点もそれぞれに「新キタスマ様式」に答えていた魅力的な作品であった。

住空間は、これからも繰り返されるであろう感染の拡がりや自然災害、あるいは別種の社会的な変化に柔軟に対応できるものでなければならない。建築に携わるものにとって、今まで以上の創造性が求められているともいえる。そのような姿勢を今回のコンペの作品から再確認することができた。応募者のみなさんのさらなるご活躍を期待したい。

審査委員長 米田 浩志